

徳川家康 12

続軍策利の巻
開ヶ原の巻

徳川家康

山岡荘

徳川家康

続軍荼利の巻・関ヶ原の巻



山岡莊八 講談社



徳川家康 第十二卷 続軍荼利の
卷 関ヶ原の巻 昭和三十九年十
一月十五日第五刷発行 著者山岡
莊八 発行者 野間省一 印刷所
豊国印刷株式会社 製本所 和田
製本工業株式会社 発行所 株式
会社講談社 東京都文京区音羽町
三ノ一九 振替 東京三九三〇電
話 東京(九四二)一一一一(大代表)
©山岡莊八 一九六三 定価 六百二十円

徳川家康

12

続軍荼利の巻
関ヶ原の巻

目次

続軍荼利の巻

機は熟す

七

破滅の心理

二八

東行西探

四六

西の挑戦

六四

不退転の星

七五

伏見攻撃

九二

突風前夜

一〇六

西風競わず

一二七

関ヶ原の巻

静かなること

一三九

戦端開かる

一五四

見えぬ采配

一六九

松尾山の眼

一八五

石田草

一九七

東軍進発

二〇九

火蓋切らる

二二〇

戦の皮肉

二三一

勝敗の鍵

二四二

老虎若豹

二五六

勝者の陣

二六八

敗者の点晴

二八四

虜囚の駕籠

三〇五

新しき地囃

三二〇

女の意地

三三九

淀君日記

三五五

預かる者

三七〇

政略婚略

三八一

付録 (参考地図及び諸家系譜)

装幀 稲垣行一郎
挿画 木下二介

箱裂地 麻地草花人家文様茶屋染
提供 山口勉
表紙金版 徳川家康直筆署名

徳川家康

12

関ヶ原の巻
続軍荼利の巻

続軍荼利の巻

機は熟す

一

家康の上杉征伐の準備は、世上の噂と並行して、否応なしにすすめられた。

強引といつてよい。増田、長束、中村、生駒、堀尾の五人が連名で諫めたのも一蹴したし、両加藤、細川、福島、黒田らの使者を派しての忠告もしりぞけた。

加藤たち太閤子飼いの者のいい分は、

「——内府みずからのご出馬はご無用、上杉を討つとあらば先ずわれらにお命じありたい。想うにこれは治部やその

一味の奉行どもが、景勝の謀叛を餌にして、内府を釣り出し、その留守に何ごとか謀ろうという企てに相違ござりませぬ。呉々もこの点ご留意するように」

しかし、家康は、人が違つたようにかたくなであつた。

「——ご忠告はありがたいし、各位のご好意がわからぬわけでもない。しかし、ここはこの家康の存念に任された。このままでは公儀のご威光も薄くなる。そのうえ、太閤が、島津や北条を召したが上洛せぬので、これを征伐した先例もあることなれば、秀頼さまがご幼少なればとて、公儀を軽んじた罪は問わねばならぬ」

世間では、このように家康をかたくなにしたのは、上杉家の家老直江山城守兼統の、承兌にあてて寄こした無礼きわまる手紙のせいだと受取っている。家康もまた、その事を、

「——わが六十年に近い生涯で、これほど無礼な手紙は見ることがない」

とも、しばしばもらした。

そして、会津攻撃は七月半ごろと決め、初めて大坂城内で軍議を開いたのは六月二日のことであつた。

むろんこの間に、諸大名の動向は仔細に探查されている。当然味方する者、味方させねばならぬ者、日和見を許しておいてよいもの、然らざるもの……

この間に家康の動きが、どのように活発なものであったかは、彼が福島正則に宛てた手紙だけでも十数通に及んでいることから想像できよう。

したがって六月二日の軍議は、在坂の諸将を一堂に招いて、改めてその動向を見きわめるという意味を持つ会合だった。

列席しているものは秀頼の側近十数人と、前田、増田、長束、大谷等の奉行のほかに、浅野幸長、蜂須賀豊雄、黒田長政、堀尾忠氏（吉晴の子）、池田輝政、細川忠興、有馬則頼、山内一豊、織田有楽、堀直政、それに家康の側近などで、西の丸の大広間いっぱいに居流れていた。

むろんまだ敵味方入り混つての同席なのである。それぞれに意見を持っていたであろうが、家康は、のっけから、「このたび上杉征伐をするに当って、会津攻めの前進部署を決めたゆえ、まずそれを披露しよう」と、きびしい表情でいい渡した。これでは評定ではない。しかし一座はシーンと静まり返って熱暑の中で扇を使う者すら無かった。

「ひとつ、白川口は、この家康と秀忠、ひとつ、仙道口は佐竹義宣、ひとつ信夫口は伊達政宗、ひとつ米沢口は最上義光、ひとつ、津川口は前田利長と堀秀治……」
聞いていて人々は思わず顔を見合せた。

誰の眼にも三成側と映っている佐竹や最上が、重要な攻め口の大將にあげられているのだから無理もない。

二

（これはいったい、何という人選か……？）

当然、各大名は会津を攻める五つの口に、それぞれ配属されて行くのに違いないと……、いうよりも、家康が出陣してゆけば、三成が上杉に呼応して起つであろうこと想像にかたくない。その折に、三成方の佐竹義宣や、最上義光に大切な攻め口を任しておいて、何とする気か……？

しかし家康は、そうしたみな疑問の前は素通りして、さっさと言葉をつぎに移した。

「予の大坂出發はこの月の半ばとする。途中江戸へ立ち寄って会津の攻略は七月下旬のころとなろう。それゆえ、おのおのには、早々に国許へ帰って出陣の支度を整えてもらわねばならぬのだが……」

もうそのころは、淡々として一片の惑いもとどめぬ口調であった。

「秀頼さまの側近は、むろんこの城に残ってもらわねばならず、政務も渋滞なく裁いてゆかねばならぬ。それで、秀頼さま補佐として、この城に残ってもらう奉行衆岡三人は、誰々がよからうかの？」

ここに至って始めて評議の形になった。

開戦はもはや既定のこと。誰が残って政務を見るかということは、いわば今度の戦の戦果の鍵を誰に托すかということでもあった。

会津でどのように勝ち戦をしてみたところで、この城であっさり三成に渡すようなことがあったら、家康は再び大坂へは戻れまい。それでは勝利がそのまま江戸隠退の敗北になってゆく。

みな視線はいちように奉行たちの上に注がれ、奉行たちの額には、見る見る汗の玉が光った。

増田、長束、前田、大谷と奉行たちはみな家康より三成と親しい。それがわかつているだけに、誰を残すかということは、居並ぶ者の関心の的になる。

いや、居並ぶ者よりも、さらに息詰る思いをしているのは、当の奉行たちに違いない。

増田長盛も長束正家も、現に三成と密接な連繫を保っているのだ。前田玄以にしても大谷吉継にしても、三成に叛心ありやなしやまでは確め得ないにしても、決して家康の腹心ではなかった。

もしこのうち誰が残され、彼が出陣するにしてもこれはただでは納まらぬ危険を多ぶんにくんでいゝる。

(このようなことをいい出して、実は、全然別な人物を残

す気ではあるまいか。誰かがそれをいい出す役割りを買って出るのでは……?)

その緊張が、ひとしきり重苦しい暑さを沈澱させたところ、

「みなにかくべつ意見がなければ予が指名しようか」

家康は、さり気ない表情で、ずっと一座を見渡した。

「やはり、二人では足るまい、三人居らねばのう」

増田長盛が、ごくりと音をたてて唾をのんであたりを見廻した。長束正家は、全身を硬直させて、家康を正視するのがせいっぱいの努力らしい。

「まず前田法印は残ってもらおう。お許は武将というより文官じゃ」

「は……はい」

「つぎにはやはり政務にくわしい者がよいから増田右衛門、長束大蔵、この三人であろうな。大谷刑部には出陣してもらおう」

人々は、ふたたび啞然として不審の瞬きをくり返した。

三

列席者の中には、声のない動揺が湧きおこった。

家康の言葉がいちいち意表をつくからだった。

三成側と見られる三奉行を大坂に残して発つというの

は、家康が全く三成への警戒心を解いているのか、それともわざと彼らに蜂起の機会を与える気なのかわからなかった。

前者だと思えばそう思えないこともなかった。とにかく七将が三成の首を狙って追い討ちをかけたおり、家康は三成を救って無事に佐和山城へ送り届けている。

したがって、七将側に近い人々は、

（——あの時、家康と三成の間に、何か大きな密約があったのではあるまいか……？）

そうした疑念が湧いたとしても無理はない。

その反対に、わざと大坂を留守にして、三成に蹶起の機会を与えるつもりではあるまいか？ と、人のわるい疑念を抱くのは日和見の諸将であつた。

もしそうであるとすれば、家康は三成など始めから歯牙にもかけない、大きな大きな自信に支えられていることになる。

悠々と上杉を討って、それから江戸で陣容を立て直し、そのまま反転して大坂を取り返す……

もしそうなるものとすれば、豊家の運命は風前の灯ともなりかねない。

三成は大坂城へ入って来れば、三奉行と共に、幼い秀頼を擁して、家康を逆賊呼ばわりにするに違いなく、逆賊呼

ばわりして立った敵の主魁となれば、家康は何の遠慮もなく秀頼を討てる道理であつた。

（これはいよいよ大事になった……）

そう思った者はあつても、いますぐにそこからハッキリとした決断を導き出して、口に出せる者はなかった。

「わしと秀忠の本隊へは関西の諸將を付し、米沢口の最上義光には奥羽の諸將を……また、津川口の前田利長と堀秀治の部隊には秀治の与力たる村上義明、溝口秀勝を付けてやる」

また家康の言葉は、淡々としたいい方から、否応いわずぬ独裁ぶりに変わった。

「こんどの戦は、いわば太閤のご遺志による天下の統一に、水さす不心得ものを一掃するにある。その意味では、太閤のご遺志が成るか成らぬかの天下分け目の戦ともなるう。すでに家康は禁裏へのお届けは相済ました。禁裏からのご内意によれば、この八日に勅使として権大納言勸修寺晴豊卿が大坂へ下向なされ、この家康の出馬を慰勞下さるのとのこと……その勅使をお迎えしたあとで、秀頼さまに告別申し、すぐさま出発することとしたい。その折には、秀頼さまから正式に、三奉行は大坂に残留して補佐し奉るようお言葉があるうが……若君補佐の役は、前田、増田、長束の三奉行で異存はあるまいの」

突然また三奉行の名を出されて、みなハッとしたようだったが、突嗟に答える者はなかった。

「異存はないと見える。ではおおよそは決定した。人数その他は、あらためて各自と家康が間で相談する。では本日はこれまで……」

家康がそういう切った時に末座から、あわてて声をかけたのは、こんどの戦の道先案内を内命されている堀監物直政だった。

直政は今日の会合を額面どおりの戦評定と受取っている
と見え、

「恐れながら、それがしの所存を申し上げたく存じます」と、一膝すすめた。

家康は渋い表情で舌打した。

四

「監物直政、まだ腑に落ちぬところがあると申すか」

家康に舌打ちされて堀直政は昂奮した。

「はい。ご出馬とご決定なされたうえからは、軍議に、そう、うがあつては一大事かと心得まする」

「申して見さっしゃい。どこが腑に落ちぬぞ？」

「申し上ぐるまでもなく、奥羽の地は嶮難の場所が多うござりまする」

「それゆえ、汝に道案内をせよと申したはず」

「それゆえ申し上ぐるのでござりまする。中にも、白川より会津までの間は、背あふりと申す無双の難所がござりまする。ここは人一人ずつしか渡れぬ馬の背に似た嶮難な岩道にござりますればお先手に落度のないよう、よくよくご深慮をめぐらさるるが大切かと存じまする」

堀直政が愚直な性格そのまま面にあらわして胸をそらすと、

「だまらっしゃい！」

家康は、ビリリと天井にひびく声で一喝した。

「監物、大事とは何事ぞ。嶮岨ならびなき場所ならば尚さらのこと、敵の繰り出す槍も一本ならば、味方の繰り出す槍も一本、槍の勝負は兵の強弱にあって、地の嶮わしさにはない。さような場所の先陣は、この家康が勤めて見せる。われらは昔、岡崎一城の主であった頃から或いは多勢に囲まれ、或いは大敵を迎えて広場の野陣はいわずもがな、夜討、伏兵、抜け駆け、先手、後詰、殿と勤めぬ役は一つもない。しかも一度も落ち度なく敗れを取らねばこそいま関八州を管領致しているのだ。これみな軍略、武術、調練の抜群を証明してあまりあると思わぬのか」

思いがけない怒声を浴びて、
「はッ」と、直政は平伏した。

「それに何ぞや、景勝ずれが分際にて、狭小な小城に立籠さしこもってわれを迎え討つとは……味方は天下の大軍、その上兵糧の輸送も自由自在じゃ。景勝ずれの征伐などわれ一人で充分ながら、天下統一の義軍ゆえ、名分を明らかにするために大ぜいで参るのだ。要らざる口出しは小賢しいぞ」

「ははッ」

直政の再び平伏するのを見て、

「他に意見は？」

家康は怒気をふくんだまま問い返した。

こうなっているはいよいよ発言する者などあろう筈はなかった。すでにすべては家康の胸の中で決定し、有無はいわさぬ構えなのだ。

「これで、みな解ったようでござりまするな」

と、取りなすように片桐且元が口を出した。

「禁裏からも若君さまからもご慰勞受けて、内府直々のご出陣とあれば、みなその心で、出する者も守る者も、充分ご奉公が大切でござりましょう」

家康はチラと且元を見やり、それから改めて一座の者を睨み渡した。

人数や所属のことは改めて各自と相談するというのだから、これ以上かつに口出しして、あらぬ疑いを受けてはと、みな一様にうなずき合った。

中にただ一人、凝然と端座したまま家康に表情を見せないのは顔中白布で包んだ大谷刑部少輔吉継だけであった。彼は天刑病を發したと称して、面をきれいに包んでいる。

家康はキラリとそれを見やって、

「ではこれまで」

と、席を起った。

五

秀吉が諸將を召集したおりには、きつとあとで酒宴があった。評議のおりに、散々叱られた者が、あとの酒宴で、肩をたたかれたりなぐざめられたりして笑い合うのが秀吉の癖であった。

ところが家康はめったに叱りもしない代りに、叱ったあとで機嫌を取るようなことは絶えてなかった。

「——しわいお人よ。酒がおしいのじゃ」

秀頼側近の七手組の面々などはそんな蔭口を利いていたが、心ある諸將にとつて、今日の家康の恫喝どくわは骨身にしみたようだった。

秀吉の臨終直前に、一度家康は伏見城でみんなを恫喝どくわしている。

「——喧嘩がしたくばするがよい。その代り一人もこの城は出さぬ。みな成敗してのけよう」

城の四方の門を閉させ、登城者一同の度胆を抜いたことがある。恐らくそれに匹敵する今日の威丈高な怒声であった。

謙信以来、強兵では日本一と自負している百二十余万石の上杉景勝を、

「――景勝ずれが分際で！」

歯牙にもかけぬといった口調で罵ったのだから、他の武将たちが震えあがるのも無理はなかった。家康にしてもむろんそうした反応は計算に入れた怒声であったに違いない。

家康が席を立つと、諸将もいっせいに起ち上った。すでに家康側と心を決めている者も、その反対者も、日和見の人々も、みなそわそわと下城していった。

恐らくこの後は、あの屋敷からこの屋敷へと、打ち合わせの使者が織るように往復しだすに違いない。

遠州掛川の城主山内一豊も、まだハッキリと心を決しかねている日和見の一人であった。

彼は西の丸御門の櫓形^{ますがた}まで来ると、続いて出てきた大谷吉継に声をかけた。

「刑部少輔どの、内府は強引に上杉征伐をお決めなされた。何か曰くがあつての事でござらうか」

四人の奉行のうち、病身の大谷吉継だけが出征の側にま

わされた。それについて吉継がどんな感想を抱いているのであろうか？ それは一豊にとつても十分参考になることだった。

「これには深いご思慮があるようだ」

吉継は繻帯の中で、わずかに笑ったようだ。

「どのようなご思慮がござらうか？」

「されば、国に叛徒のあるおりは、相手の準備の整わぬうち、直ちに兵を発して討つという、慣例を作っておこうとなさるのでござらう」

「それにしても、監物どのを叱られた、あの叱りようは尋常ではござらなんだが」

「怒られたのでござるよ。怒られると怖いご仁……めったに怒られぬが、怒られる時はある」

「すると、刑部どののご自身で、内府について戦に出られまするか」

「参ります。禁裏からも秀頼さまからもご苦勞ながらといわれて出陣する内府、それに従わねばわれらも叛徒と相成りまする」

「フーム」

「内府のご決心は、あのお方が怒声を発するほどに固く動かぬものよう」

山内一豊は、鄭重に一礼して吉継のそばを離れた。

機は熟したらしい。家康の怒声はすでに諸將の心に、滔^{たう}滔^{たう}と滝を落してゆくほどの、決定的な迫力を持ち出している。この勢いに誰がいったい逆らい得ようか。

(禁裏から若君へと、きちんと筋が通っている……)

六

大坂も伏見も京も、あわただししい戦雲に包まれた。

家康が六月二日の会合で告げたとおり、八日には権大納言勸修寺晴豊が、京から勅使として大坂に下向し、家康の出馬の労をねぎらったうえ、さらに百反を賜った。

家康は勅使を迎えるとすぐさま、手勢をまとめにかかり、十五日にはすっかり準備を終って秀頼に謁し、告別の挨拶を交した。

「江戸の爺は奥州まで戦に出てゆくそうな」

七歳の秀頼にそういわれて、

「はい。お父君太閤さまのご遺志は、天下の統一、そのお志にそむくものがあれば、それが何地^{いずち}であろうと捨ておけませんぬ」

「奥州は遠いのであろう。ご苦労ながら、頼みまする」

そして、片桐且元の指図で、秀頼の贈物が家康の前に積まれた。正宗の小刀と茶器と黄金二万両、それに軍用米二万石の目録が附されてあった。

秀頼のかたわらには、硬ばった表情で、淀の君が控えている。

当時大坂城内では淀の君は、家康とでき合っているという噂があった。以前家康からいい寄られたおりには、淀の君は大野修理の子を孕^{はら}んでいたのでさり気なくしりぞけたが、その後は淀の君も家康に心を移したらしい。しかし家康には、そのころ若い側室の阿亀の方がついていて。それで、勝気な淀の君は、また遠ざかったとかいう噂であった。

「――不埒なことをいいふらす。そのようなことがあるものか。あらぬ噂を流すと許さぬぞ」

片桐且元が、その噂を聞くと真剣になんて叱りつけるというのもまた噂の上の噂であった。

「この爺は戦に出てまだ負けたことはござりませぬ。今度も勝って参りますゆえ、ご母堂さまと安心してお待ち下され」

秀頼……と、いつでもそれはみな、且元と淀の君に訓えられた鸚鵡^{うぐいす}であったが、別盃の行事も明るくあって本丸を退出すると、その日のうちに、家康は西の丸に、前田玄以、増田長盛、長束正家の他に、佐野綱正を呼んで、秀頼の命を伝えた。

三奉行は家康に代って留守中の政治を見ること。佐野綱